

Five Years

参画プラネットの5年間

わたしをつくる、

仕事をつくる、

社会をつくる。

参画プラネットの5年間

—わたしをつくる、仕事をつくる、社会をつくる。

★ 明石雅世

NPO 法人参画プラネットが設立して5年が経ちました。

私自身は、この5年の後半3年を参画プラネットから地域に身を置き、自身の地域で、地域福祉や子育て支援を行ってきました。たとえば、視覚障がいがある方の個別支援のあり方を考えるモデル事業を通して、身近な人による支えあいのしくみ作りを検討してきました。結局は、行動を共にすることが、視覚障がいのある方の理解を深めることだと気づきました。また、0～3歳の子どもと親の出会いと交流ができるスペース「つどいの広場」を実施してきました。地域のおばちゃんが、何気に、子と親の応援者になりたくて始めた事業でしたが、「受容」と「自己決定」の大切さを学びました。

並行して、この5年の月日は、我が子の成長を見つめながら歩んできました。小6だった次女は高1に、高1だった長女は20歳になりました。子どもが一步ずつ大人に向かうプロセスを間近に感じながら活動を続けてきました。そして、この活動の経験知が、娘たちの距離間を程よくし、けんかもしますが、お互いを尊重できる関係に作用していると実感しています。

日々の暮らしの中で、人は関係をつむぎ、出会いと別れを通して、人生に深みや色を添えていくのだと思います。「“孤独”は自分で選んでいるんだ」というドラマの台詞が頭から離れません。暮らしの中で気づくのも自分、変わるのも自分と言いきかせ、暮らしの中で活動を続けていこうと思っています。

★ 伊藤静香

NPO 法人参画プラネットが5周年を迎えた。正直なところ、5周年であることを忘れていた（笑）。言い訳ではないが、この活動を長く続けることよりも、「何をするのか」の方が重要だと、わたしは思っている。

この5年間でわたしの生活は大きく変化した。専業主婦から一步を踏み出し、社会とつながりたいという思いで参画した社会活動が仕事になった。これからという時に、夫の都合でカナダに転居。作りさえわからないまま初めて手がけた、たった4ページの参画プラネットのホームページは、太平洋を越えてカナダで制作した。自分たちのこれまでの活動をまとめた論文をヌエックの研究ジャーナルに投稿し、掲載された。帰国後は、その実績で短大卒ながら大学院を受験する資格を取得し、受験することができた。博士後期課程に在籍しながら仕事と学業の両立を続ける今のわたしの生活など、5年前は想像もしていなかった。振り返ってみれば5年という月日がたった。その間に、参画プラネットでは

普通の女性たちが仕事をつくり、キャリアをつくり、新たなステップを踏み出している。

わたしにとって参画プラネットの活動は、「あきらめない社会をつくる」ための手段である。男女共同参画というキーワードでつながったメンバーが参画プラネットという組織を媒体として集結し、それぞれの目標達成のために活動する。これが、わたしの参画プラネットのイメージである。

★ 重原惇子

NPO 法人参画プラネットが誕生して5年目。私の55年の人生において、50歳からの5年間がこの参画プラネットの5年間で重なることになる。生活も仕事も大きく変化した。子どもたちが独り立ちをし、夫と二人の生活が始まった。仕事において1年目は、指定管理者事業に携わり、2年目は若年層の支援と修士論文完成が目標となった。3年目はインタビューライターの業務に専念し、4年目は再度若年層支援に携わり、5年目はキャリアコンサルタントとしてフルタイム勤務をこなしてきた。

参画プラネットが、その関わり方に濃淡はあれ、私の生き方の基盤であることに変わりはない。キャリアコンサルティングの業界では、男女差はほとんどなく技能や経験値が問われる。だが、いやだからこそか、実際の支援の現場では驚くほどジェンダーの意識が希薄だ。多くのクライアントが抱える課題に、本人や周囲のジェンダー規範が影響していると感じる場合も多々ある。それを他のコンサルタントと共有できないもどかしさの中、参画プラネットの仲間たちとで男女共同参画推進の意義や使命をあたりまえに語れる時間は、私の新たなエネルギー源となる。参画プラネットに感謝である。

★ 渋谷典子

5年という月日—わたしの人生のなかでは「修行」続きであったように思う。小さいころから、亡き母の言葉を借りれば「のんびり」「のん気」「マイペース」だった毎日。参画プラネットの代表理事という立場になり、この三つの言葉から脱出する必要性が出てきたからである。特に、名古屋市男女平等参画推進センター指定管理者事業がスタートしてからは、市民対象の施設管理を担っていることから緊張が続く毎日。その責任は多様で重大。同時並行して、名古屋大学大学院法学研究科博士前期課程に入学し修士論文を執筆。その後、思わぬ展開から博士後期課程へと進学することに。このごろは、選んだテーマが「NPO活動と労働法」であったため、大学院での研究が糸口になり日々の活動での課題を解決できることも多くなってきた。

2011年4月1日、参画プラネットとしては第二期の指定管理者事業が始動。組織改変により、これまで協働運営をしていた名古屋市職員の方々が本庁へと異動。この日、わたしは名古屋市男女平等参画推進センターのセンター長となった。これから、5年。まだまだ続く、「修行」の毎日。

★ 中村奈津子

わたしが3人の子育てをしつつ外で働くという選択をしてから、早8年が過ぎようとしている。現在、活動に参画しているNPO法人参画プラネットも、2010年には5周年を迎えた。振り返って歩んできた月日をもたらした身の回りの出来事のあれこれと、自分と周囲の変化に思いをはせると、「10年一昔」の言葉が実感として胸にしみる。さまざまな出来事の中で何度途方にくれ、立ち止まろうとしたか分からないけれども、多分に支えあって過ごしてきた家族や仲間たち、応援をしてくださった周囲の方々の存在があってこそ前を向いて歩いて来られた。そのことに、まずは心から感謝をしたい。

21世紀に入り、ゼロ年代は足早に過ぎた。社会の様相と同じく、NPO活動を取り巻く状況も刻々と多様な変化を遂げている。今後、より効果的に社会の課題を解決していくには、一つの組織の力ではもはや難しく、多様な主体者や組織がつながり、協働で課題に取り組む必要があるという認識も広がってきた。参画プラネットは、メンバーそれぞれがNPO活動以外の活動に主体的に関わっており、様々なフィールドとのつながりを持って実践を続けている点が個性のひとつだと受け止めている。「これから」に向かっては、この、一つ所に止まらないしなやかさを前向きの変え、わたしも微力ながらより良い社会を次代へつなげられるよう尽力したいと思っている。

★ 林 やすこ

2005年、NPO法人参画プラネットが活動を始めた頃、わたしは放送大学大学院に在籍し、女性の参画をテーマに研究に取り組んでいた。振り返ってみると、2000年直前、女性センターでの講座がわたしの生き方を大きく変えることになった。女性学や男女共同参画を知り、「ワークシェアリング」と「女性の参画」をライフワークにしようと考えてようになっていく。参画プラネットの活動は、まさに実践の場であり、そのなかでわたし自身もわたしの研究も進化しているのだと実感している“今”である。研究のテーマには、「評価」が加わった。三つのテーマを融合させ、研究を深めていきたいと考えている。参画プラネットの推薦を受け、2010年4月には大学院（後期課程）という研究の場を得た。参画プラネットと大学院がわたしのフィールドである。

とはいうものの、参画プラネットでの仕事とともに大学院の後期課程に在籍する学生兼介護を抱える介護サポーターでもある。わたしを支えてくれているのは、ワークシェアリングを取り入れた働き方の仕組みとともに周囲の人たちの理解と励ましが大きい。これも参画プラネットのもつ社会的資源である。

「わたしをつくる、仕事をつくる、社会をつくる」—参画プラネットの活動を表現する、わたしの好きな言葉である。個人から社会へ、柔軟な発想を育み、実験的な取り組みを重ねながら、新たな価値観を創造していく。参画プラネットの「これから」も楽しみである。